

特別対談

「50年のあゆみとこれから」

浦安市自治会連合会 会長

上野菊良

浦安市 市長

松崎秀樹



まちづくりの主役は住民です。その住民が活動する場としての自治会の役割には大きなものがあります。一方住民の声を集めて計画策定や事業を進める浦安市（行政）も、まちづくりのもう一人の主役です。これまで両者はパートナーとして緊密に連携・協働しながら、よりよいまちづくりを進めてきました。

50周年を記念して松崎秀樹浦安市長と上野菊良浦安市自治会連合会会長に、浦安の自治会そしてまちづくりの歩みとこれらについて語り合っていました。



自治会と行政は安全・安心で 元気な浦安づくりの両輪。 50周年を越えて、 協働・協治のまちづくりを進めていきます。

昭和38年、9つの自治会で 自治会連合会が誕生

松崎 浦安市自治会連合会設立50周年おめでとうございます。現在81自治会だそうですが、さまざまな形で浦安市の事業や活動にご協力いただきありがとうございます。

上野 ありがとうございます。浦安市には自治会集会所の整備や各種自治会活動のサポートなど、いろいろとご支援をいただいています。この場をお借りしてあらためてお礼を申し上げます。

松崎 当時は浦安町でしたが、昭和38年に9つの自治会により自治会連合会が設立されました。

昭和38年といえば、東京オリンピックの前年です。半世紀を経た記念の年に、2020年の東京オリンピックの招致が決まったというのは何か縁があるのかもしれません。

上野 記録を見たり話を聞いて知ったのですが、第二次大戦後に浦安町内の全世帯を会員とする「浦安町消防協力会」というものが発足しました。当時は堀江、猫実、当代島の旧三村ごとにくつつかの区があったそうですが、独立した組織ではなく協力会の下部組織的な位置づけでした。

昭和24年にキティ台風が浦安を襲った時には、協力会がめざましい活躍をしたそうです。次第に町と連携する活動が拡大したことで、「浦安町自治

協力会」に改称しました。

その後「自分たちの区は自分たちの力で住みよいコミュニティ（地域社会）にする」ことが自治の基本という考え方から、各区が独立した事業を行う組織として9つの自治会が誕生しています。

そして、昭和38年にその連絡・調整機関として自治会連合会が設立されたとのことでした。

松崎 浦安町が埋め立て事業を開始するのが翌年の昭和39年からです。この時期は浦安にとって大きなターニングポイントだったのでしょう。

上野 昭和40年代に埋め立てが進み、住宅公団（現UR都市再生機構）や民間ディベロッパーの住宅開発が始まります。昭和44年には地下鉄東西線の浦安駅が開業して、鉄道が無く陸の孤島と呼ばれていた浦安が注目されるようになります。まさに現在の浦安に向かう黎明期といえますね。

三社祭や災害で感じた 町内の結びつき

松崎 私が浦安に転居してきたのは昭和51年のことです。昭和53年から人口が毎年1万人ずつ増えていきますから、浦安が急成長する直前ということになります。

申し訳ないのですが当時は「浦安」を知らませんでした。家内が習志野市の出身ということから、

転居先を探して、住んでいた東京の町田市から多摩川を越え、隅田川を越え、荒川を越え、江戸川を越えて浦安にやってきました。

東西線の浦安駅を降りた瞬間に7月下旬の磯の香りが鼻をくすぐりました。趣味でダイビングをするほど海が好きで、海の近くに住みたいという悲願を持っていた私は、浦安がいつまで気に入らぬ、堀江に引っ越してきました。

上野 私の住んでいる日の出地区では、今でも時々磯の香りがすることがありますが、当時は浦安の町中に海の香り、磯の香りがしていたのでしょうね。

松崎 実は後輩から「浦安は排他的で喧嘩が多い大変な町だ」と聞かされていました。実際に、近所の人に挨拶しても返事がないという体験をして疎外感を感じたこともありました。

ところがたまたま手元にあったミニコミ誌を見たら、「浦安には朝のあいさつをする習慣がない」と書いてある。ああそういうことだったのかと、まさに目からうろこでした。それ以来近所の人とのコミュニケーションがうまく取れるようになりました。今から思うと隔世の感がありますね。

上野 当時の堀江は、町内会や自治会活動も活発だったでしょうね。

松崎 私が最初に意識したのは自治会というよりは町内会、町内のつながりでした。町内の顔見

知りが浦安三社祭りに参加するというので頭を剃り上げてきたりする。そういう姿を見ると地域のつながりというものを感じました。

その後、同世代の仲間を増やしたいと青年会議所の立ち上げに参加したのですが、隣近所あるいは住んでいる堀江地区など、地域の個性がだんだんわかるようになってくると、地域の最小単位である自治会を意識し始めました。

昭和56年10月に台風24号が来襲。浦安は床上浸水が300戸を超え、災害救助法が適用されるほどの大きな被害に遭遇します。我が家もあと数ミリで床上浸水被害という状態までいき、被災世帯ということになりました。

市役所から毛布などをもらったのですが、何より隣近所の人たちが救援や何かと助けてくれたときに、町内会というか自治会の良さや必要性というものを強く実感しました。

上野 私は、平成になってから東京から浦安に移ってきました。市長に比べると新参者ということになります。

私が住んでいたのは東京の下町で、例えば近所の人が醤油を貸してくれと家の中にどんどん入ってくるんです。そういう近所づきあいになじめなくて、新しくできた街ならば、と日の出に引っ越してきました。

子育ての間の仮の住まいと思っていたのですが、気がつけば居ついてしまったというわけです。

松崎 居ついてしまったというのは、環境が良かったということですか。

上野 幼稚園や小学校に歩いて0分。そんな環境を家内や子どもがとても気に入ったようです。

その当時は自治会というものをそれほど意識したことはなく、自治会活動を通じて何かをやりたいたいということはありませんでした。ただ自分の興味もあって、三番瀬に子どもたちを連れていくという子供会のような活動をやってきました。そのうちに小学校や自治会の方から、三番瀬で学習会のようなものをやってくれないか、という相談を受けるようになり、そうした経緯で自治会に関わ



るようになりました。

頼まれると断れない性分ですので、気がつけば自治会長を務め、さらには自治会連合会の会長という大役を仰せつかっていました。

まちとともに拡大する自治会の輪

上野 昭和40年頃の浦安市の人口はおよそ1万8,500人。それが昭和50年代に急増して9万人を突破します。その後も増え続けて現在は16万人を超えているわけですが、単純計算では市民の9割近くが、市長や私のように浦安以外から引っ越してきた方々で占めているということになります。

松崎 人口急増が本格化した時期の昭和56年に美浜に引っ越しました。台風24号による浸水の影響で建物がダメになってしまい、迷った末に急成長している中町地域に移ったわけです。

J R京葉線の開通前（蘇我～新木場の一部開業は昭和63年、東京までの全線開通は平成2年）でしたが、工事中的新浦安駅前周辺は、住都公団（現U R都市再生機構）や民間デベロッパーによる大規模集合住宅等の建設が続いていました。

そんな状況で、中町地域はまだ活気があるというほどではないが、活気が生まれる直前のまちという雰囲気でした。

上野 中町地域はまさに開発と人口流入が進行中で、一方、新町地域は埋め立て直後の広い原っぱが広がっている感じだったそうですね。野っ原に野犬の群れ、ザリガニ、カエルの合唱、新町地域はそんな場所だったと聞いています。

松崎 美浜では、だれもが初めて知り合ったお隣さんばかりでしたから、近所づきあいもこれから始まるということで、住民も生活環境も堀江とはまったく違っていました。

小学校のPTAの立ち上げや自治会の創立メンバーにも加わったのですが、いろいろな地域から引っ越してきた人たちの集団ですから、PTAや



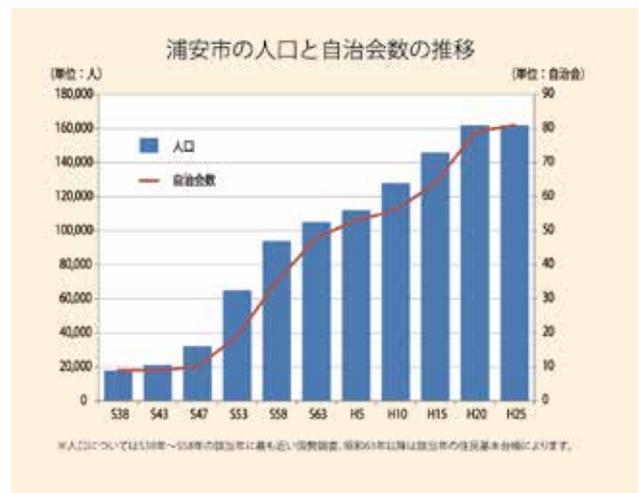
自治会といった組織に対する考え方が違っていて、時には軋轢（あつれき）もありました。

特に異文化というか、異なる歴史を持つ人たちが一つのテーブルについて、自治会という組織を生み出すのは、とても難しく大変でした。しかし今から思えばよい経験をしたと思っています。

上野 昭和50年代は自治会の設立ラッシュでした。自治会連合会は13自治会から42自治会の組織へと、3倍以上になっています。

元町のみなさんからみれば、中町地域は「埋立地」だし、引っ越してきた人たちは「よそ者」という意識があったようです。ところがいつの間にか「よそ者」の方が多くなってしまいます。

浦安の風習や過去のしがらみを知らないし、こだわらないから、会長の任期制など自治会も新しい仕組みが取り入れられたようです。平成になっ



て新町地域への人口流入が始まりますが、そうした構図は変わりません。

松崎 浦安にはかつては地主がいて網元がいて、それを頂点とした社会が長らく続いていました。

浦安には「おおよ！」と「けっ！」という相づちがあります。目上の方が「おおよ！」と返してきたときは、その話に賛成だということ。逆に「けっ！」とか「かっ！」とか吐き出すような言葉を使ったときには、その話題はするなっていう意思表示です。言葉から意思を読み取って、自分の意見をそれに合わせるっていったことが必要でした。

これに対して地域外からたくさんの人たちが越してきたことで、しがらみのない対等な人間関係のコミュニティがひろがっていった。これは浦安という街の大きな特色といえるでしょう。

上野 平成22年の「3.11 浦安震災」は大きな転換点でした。被害が少なかった元町の人たちが、洗濯機を買って中町や新町地域の人たちに使ってくれとか、食料の差し入れをしてくれたり。

元町のお年寄りに残っていた「埋立地」「よそ者」という意識よりも、同じ町に住む仲間を助けようという意識や行動がひろがった。あの震災で、浦安の自治会は一体感が生まれたようです。いい動きになったなど感じましたね。

松崎 そうですね。かつての排他的な風土も薄らいで、みなさんおおらかになってきたように感



じます。風土がなくなったのではなく、受け入れるようになってきたというのでしょうか。

自治会は「協働」と「協治」のパートナー

松崎 自治会というのは、他人同士が関わる最小単位の運命共同体だと思います。共通する課題にみんなで対応し解決する組織です。

解決すべき課題は共同体によって異なります。例えば美浜のある自治会が高齢化率が36%を超えているのに、人口規模が同じ日の出にある自治会は1%を超えただけ。その格差は35倍です。当然住民ニーズやコミュニティの課題も異なります。

行政は公平性・平等性が求められますが、これほど性格が違うコミュニティが混在する中で、これからは異なる地域ニーズを視野に入れて市制運営を行うという時代に入っています。地方分権から一歩踏み込んだ地域内分権の時代に入っていると実感しています。そういった意味からも、市民ニーズやコミュニティの課題を敏感にキャッチできるのは、私は自治会だと思っています。

上野 そうですね。自治会にとってはまさに自分たちの問題ですから、課題もニーズもはっきりわかっています。

松崎 浦安にも少子高齢化や地域間格差の問題などがあります。行政がすべての市民ニーズに対して手取り足取りやっていく時代ではありません。ニーズは多様で複雑ですし、行政の対応力には限界があります。

最近、地方自治やまちづくりに関して「協働」や「ガバナンス」という言葉をよく耳にするようになりました。「協働」は行政と市民が一緒に働こう（取り組もう）ということですし、「ガバナンス」は「協治（きょうち）」と訳され、行政と市民が一緒に自治体経営を行おうという考え方です。

浦安では、自治会こそがこの協働や協治のパートナーだと思っています。

上野 なかなか大きな役割を期待されているようで責任重大です。

残念ながら自治会加入率は53%程度にとどまっています（平成24年度現在）。個人志向の高まりなども一因でしょうが、市民全体が自治会を中心に集まってまちづくりを進めようという機運になっていないのも事実です。

ただ「3.11浦安震災」の時に、浦安市全体に広がった市民の絆や互助の取り組みを振り返ると、浦安市には「市民力」の高いポテンシャルがあるように思います。

個別の自治会で活動をしていると、どうしても浦安全体の視点というのは持ちにくいものです。その点では他の自治会の考え方や取り組みなどを知ることが重要です。

お隣や他の地域の自治会のことを知り、浦安市全体の課題や方向性を共有する。そうした場として自治会連合会の役割や意義は大きいと思います。

市民力と連携を高めて まちづくりを推進

松崎 浦安市というのは、ある意味全国の縮図といってもよいユニークなまちです。

同じ市の中で少子化高齢化が進行する地区がある一方で、子育てのための学校や保育所が足りないという地区がある。全体が一つの方向ではなく、異なる課題が地区ごとに混在しています。

新しく生まれたばかりのコミュニティから、子育て世代が集住するコミュニティ、子どもたちが巣立って高齢化が始まったコミュニティ、高齢化が一巡して世代交代が進むコミュニティなど、多種多様な性格のコミュニティがあり、地域間の違いも大きいのが浦安市です。

そうした違いを行政も市民も把握していくことが、これからの浦安のまちづくりには必要です。

上野 最近、複数の自治会による合同イベントが増えています。また自治会祭りも、管理組合や



社会福祉協議会などと一緒に開催するといった例が多くなりました。

「3.11浦安震災」がきっかけの一つになっているのですが、自治会単独にこだわらず、地域全体でという動きが広がっているように思います。

松崎 浦安は日本が抱えている問題を凝縮して、それぞれの地域で持っています。市役所・行政がこうした課題に取り組むためのパートナーは、間違いなく自治会であると思っています。

加入率の向上、魅力ある自治会、ふるさと意識の醸成などを浦安市とともに取り組みましょう。そして、好きだから自治会に入る、好きだから浦安市の計画や事業に力を貸そうという、そういう機運がさらに高まっていけばよいと考えています。

これからも浦安市のパートナーとして、自治会と自治会連合会に期待しています。

上野 すべてを行政に依存するのではなく、自分たちはこうしたいとか、こういう思いだということをしかりと行政に提案する。またこれまで以上に一緒にやっていくことができる、手を取り合える関係を深めていきたいと思っています。

「協働」と「協治」のパートナーにふさわしい自治会と自治会連合会を目指して、これまで以上に「市民力」を高めていきたいと思っています。